NY エッセイ 50

中瀬有紀

言語と社会と身体の関わり



Casino of the Earth, designed by Rockwell Group at Mohegan Sun

ニューヨークにいると周囲の人間から見て私は「日本人の」という代名詞が付き、私自身も他者との違いを自分の中の「日本文化」として言いくるめる傾向があります。同時に、最近は日本にいると私には「アメリカから来た」という代名詞が付くようになり、自分がより一層強く感じるようになった日本人であるという自覚と反比例して日本人社会から少し距離を置かれるようになりました。私はどんどんアメリカ人でもなく、かといって日本人でもないような、中性になっていくようです。何にも属さない自由と孤独の中で頼りになるのは自分の身体一つであり、それが随分日本社会から離れてアメリカ社会を受け入れていることに気がつきました。私の身体は日本にいた頃と少し違った反応をしています。

日本で仕事するときの身体は、低姿勢で重心を下に降ろし、いつでもお辞儀ができるような姿勢ですが、アメリカで仕事するときの身体は、下腹部に力が入っていて常に体を引き上げた状態であり、いつでもつま先立ちができるような姿勢をとっています。それらは無意識に行っていますが、2つの要因が考えられます。

1つは言語の違いです。肺呼吸で発声する日本語に比べて腹式呼吸で発声する英語、また主語を省く日本語の文章は責任の所在を曖昧にしやすいのに比べて、主語を必ず含み「YESかNOか」が明確な緊張感のある英語は、腹筋に力を入れさせます。またもう1つは、社会の違いです。中世の日本では人口の85パーセントが農民であり、四季のある日本で確実に刈り入れを行うための綿密な計画が施されていました。日本人の粘り強さと段取り力、また他者との調和を重んじる精神は、一千数百年にわたり徹底的に行われた稲作教育に由来します。不具合が生じた際に自分を責めやすく、謙ることを尊重する日本人の特徴が腰を低くさせます。一方で、交易、農耕、漁撈、牧畜、狩猟、また略奪などを生業とするさまざまな民族が移民したアメリカでは、「成せばなる」では成らない敵を相手に、自分の意志で決断し、他人との違いを認める強さを身につけました。全員一致である状況は偏見と興奮に基づく判決であるから無効とする状況下で、臨機応変に判断して意見をもち鋭く主張するアメリカ人の特徴が体を引き上げます。

日本人であることを忘れるとはどういうことか思考を巡らせている中でふと、そういえばニューヨークで生活していて一番ほっとするひとときは、自分という人間の存在を認める、また認められることを自覚する瞬間だと気がつきました。国籍もジェンダーも抜きにして人間として社会に属していることを許されている、そのように感じさせるひとときと人間関係に感謝し、ニューヨークにいて良かったと思います。